

相手の印象と発言が対人感情と原因帰属に及ぼす効果

豊田弘司

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育心理学))

田中俊行

(堺市立南八下小学校)

The effects of the impression for a person and one's utterance on interpersonal affection and causal attribution.

Hiroshi TOYOTA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Toshiyuki TANAKA

(Minami-yashimo Elementary School, Sakai City)

要旨：仮想場面を設定し、印象の良い相手と悪い相手からの発言がポジティブの場合（P 発言）とネガティブな場合（N 発言）の場合における相手に対する感情及び原因帰属の関係を検討した。主な結果としては、P 発言がなされた場合には、相手の印象が良い場合が悪い場合よりも快な感情が喚起されるが、N 発言がなされた場合には、相手の印象が悪い場合が良い場合よりも不快な感情の喚起が緩和されることが示された。また、P 発言がなされると、相手の印象が良い場合には相手が異性よりも同性に対する好意帰属が大きいが、相手の印象が悪い場合にはこの両者に差はないことも明らかにされた。さらに、悪い印象を持つ相手から P 発言がなされると、女子は好意帰属をすることで快な感情が喚起されるが、男子は好意帰属が快な感情の喚起に結びつかないという性差も示された。

キーワード：原因帰属 causal attribution
印象 impression
対人感情 interpersonal affection

1. はじめに

学校教育において学力の向上は重要な課題であり、児童・生徒の学習活動の質と量を高めることが必要である。そのためには、学習意欲を喚起する方法を考慮することは重要である。それは、児童・生徒の能力が一定である場合には、その個人の学業成績は学習意欲によって規定されるからである。学習意欲に影響を及ぼす要因として多くの研究がなされてきたのが、原因帰属（Causal attribution）である。原因帰属とは、ある事象に対して、ある原因を求めることである。一般に、人間は日常生活において生じる事象に対して何らかの原因を想定する。そして、その想定された原因によってその後の活動に違いが生じる。Weiner, Heckhausen, Meyer, & Cook（1972）は、原因帰属の要因として、能力、努力、課題の困難度及び運の4つの要因を提唱した。これらの要因は、元々Rotter（1966）によって考案された統制の位置（locus of control）次元によって内的要因（能力、努力）と外的要因（課題の困難度、運）、安定性の次元によって安定要因（能力、課題の困難度）と不安定要因（努力、運）に区分されている。その後、Weiner

（1979）は、上述した統制の位置及び安定性の次元に統制可能性の次元（統制可能 - 統制不可能）を加えた枠組みを提唱している。

これらの原因帰属の枠組みをもとに、学習意欲との関係を検討する研究が数多く行われてきたが、これらの研究を総括すると、学習意欲の高い者と低い者では、帰属の仕方が異なる。すなわち、学習意欲の高い者は成功の原因を自己の能力や努力に帰属し、失敗の原因を自己の努力に帰属する傾向がある。一方、学習意欲の低い者は成功の原因を運や課題の困難度に帰属し、失敗を自己の能力に帰属する傾向をもっている（豊田，2003）。したがって、学習意欲の高い者は、努力すれば良い結果が出るという期待を持つことで高い動機づけを維持することができるが、学習意欲の低い者は無力感を抱きやすく動機づけを維持しづらいことがわかる。

豊田（2016）は、仮想場面法を用いて、自分の学習活動における努力から予想される結果が得られた場面（随伴場面）と、得られなかった場面（非随伴場面）を比較した。その結果、前者が後者よりも次回への意欲の高いことを見だし、原因帰属と関連する内的統制傾向が次回への意欲に関連することが見いだされている。豊田・川崎（2017）

は、豊田（2016）と同じ場面を用い、原因帰属と意欲の関係を検討した。その結果、努力が成功をもたらした随伴場面では男女ともに努力帰属と次回への意欲に正の相関が認められた。したがって、自分の努力に帰属する程度が、次回への意欲を規定することが示唆されたのである。

ただし、Heider（1958）は、環境に適応するための原因帰属の重要性を唱えており、学習活動以外の日常生活における原因帰属も存在する。例えば、小川（2011）は、「病気」、「学業の失敗」、「対人トラブル」といった日常生活におけるネガティブな出来事の仮想場面を想定し、場面ごとの感情と原因帰属の関係を検討している。その結果、全ての場面においてネガティブな出来事に対する原因を運や他者からの妨害に帰属した人よりも自分自身の能力に帰属した人の方が落ち込み感情が高くなるということを明らかにしている。

また、上述した Weiner ら（1972）も、時間的に変化が少なく、安定している能力に原因を帰属すると、不安定な努力に原因を帰属するよりも次の行動への期待が減少し、あきらめに近い感情が喚起されることが指摘されている。このように、学習場面において原因帰属が感情に影響することが明らかに示されているが、対人関係場面においても原因帰属は、相手に対する対人感情（interpersonal affection）に影響を及ぼすと考えられる。

鹿志村（1987）は、大学生の対人場面における原因帰属の性差を指摘するとともに、対人場面の原因帰属には、自分と他者との関係が影響するという「関係的帰属」（relational attribution）を検討する必要性を指摘している。ただし、対人関係性が帰属に及ぼす効果は検討されているが、相手に対する対人感情との関係は検討されていない。また、神田（2007）では、ある個人におけるその時々判断がその人の持つ気分によって方向づけられ偏向するという気分一致効果の考え方を背景に、原因帰属との関係を検討している。しかし、この研究でも自分の感情と原因帰属の関係を検討しているが、相手に対する感情との関係は検討されていない。このように、対人関係場面における原因帰属を検討した研究は少なく、対人関係場面という社会的場面を実験的に検討することの難しいことが大きな事由であると考えられる。そして、とりわけ対人関係場面における原因帰属と相手に対する感情の関係を検討した研究は行われていない。そこで、豊田（2012）は、仮想場面法を用いて対人関係場面における感情と原因帰属の関係を検討した。そこでは友好的行動、援助的行動が、自分に要求される場合と他人に要求される場合を比較した。その結果、相手に対する感情は相手の性（同性、異性）及び好意（非好意）への帰属の程度によって規定され、好意（非好意）への帰属は偶然への帰属と負の相関のあることが示された。

ただし、このような対人場面において感情や帰属に影響するのは相手との関係である。また、その関係性から予想される発言の予想と、実際の相手からの発言内容（ポジテ

ィブ（P）内容・ネガティブ（N）内容）の適合性も重要である。すなわち、相手との関係によって相手からの発言に対する原因帰属（なぜ、この相手はこのような発言をしたのか）の異なることが予想される。具体的には、相手に対する良い印象を持っている場合には、相手から良い P 発言がもたらされると予想し、相手が悪い印象の者であれば、N 発言がもたらされると予想する。そして、その際の原因帰属も、良い印象を持つ場合には、N 発言がされた場合でも、嫌われているという帰属はなく、それは単なる偶然であるという帰属をするが、悪い印象を持つ場合には、N 発言は相手が自分を嫌っているからそのような発言になったという原因帰属になると予想できる。

したがって、本研究では、豊田（2012）と同じく仮想場面法を用い、相手との関係を反映する相手に対する印象（良い、悪い）及び相手からの発言内容（P、N）を組み合わせて、4つの場面を設定する。そして、相手に対する印象と相手からの発言内容が相手に対する感情及び原因帰属に及ぼす効果を検討する。

2. 方 法

2. 1. 調査対象

調査対象者は第 1 著者の授業を受講している大学生 131 名であり、調査終了後、この調査の意味、調査用紙の提出は成績には関連しないこと、個人的なデータとして利用しないことを説明し、承諾してくれた者から調査用紙を回収した。その結果、データの欠落があった者を除く 128 名（男性 50、女性 78；平均年齢 18.9 歳）の回答を分析データとした。

2. 2. 材料

対人関係に関する仮想場面を含む調査用紙を作成した。この調査用紙は、豊田（2012）で用いられた仮想場面を参考に、本研究の関心である相手に対する印象（良い、悪い）及び相手の性別（異性、同性）の組合せから構成される 4 つの場面を含んでいた。そして、それぞれの場面において、相手からの発言が P 発言の場合と N 発言の場合が設定された。したがって、相手に対する印象、相手の性及び発言内容（P、N）という 3 つの要因の組合せから 8 つの場面が作成されたことになる。なお、P 発言とする操作としては「あなたは、信頼できるね。」、N 発言とする操作としては「あなたは、信頼できないよ。」という文言を用いた。8 つの各場面に対して相手から発言をされた場合における感情（不快 - 快）、その相手の発言に対する好意（非好意）への帰属及び偶然への帰属の程度を測定するための評定尺度が設けられた。感情評定に関しては、「不快」から「快」、帰属評定に関しては、「あてはまらない」から「あてはまる」までの尺度を用いた。いずれも 6 段階尺度であった。本調査で実際に用いられた A4 判横置き of 調査用紙が以下に示されている。

問1 前から良い印象をもっていた異性の〇〇さんと学内で話をしていました。

1) 〇〇さんは会話中あなたに「あなたは、信頼できるね。」と言いました。
その時、あなたはどのように感じますか。 不快な← →快な

1 2 3 4 5 6

なぜそのようなことを言われたのだと思いますか。

あてはまらない← →あてはまる

1 2 3 4 5 6

あなたに対して好意をもっているから
たまたま〇〇さんの機嫌が良かったから

1 2 3 4 5 6

2) 〇〇さんは会話中あなたに「あなたは、信頼できないよ。」と言いました。

その時、あなたはどのように感じますか。 不快な← →快な
なぜそのようなことを言われたのだと思いますか。

1 2 3 4 5 6

あてはまらない← →あてはまる

1 2 3 4 5 6

あなたに対して嫌悪感を抱いているから
たまたま〇〇さんの機嫌が悪かったから

1 2 3 4 5 6

問2 前からあらこがれていた同性の〇〇さんと学内で話をしていました。

1) 〇〇さんは会話中あなたに「あなたは、信頼できるね。」と言いました。
その時、あなたはどのように感じますか。 不快な← →快な

1 2 3 4 5 6

なぜそのようなことを言われたのだと思いますか。

あてはまらない← →あてはまる

1 2 3 4 5 6

あなたに対して好意をもっているから
たまたま〇〇さんの機嫌が良かったから

1 2 3 4 5 6

2) 〇〇さんは会話中あなたに「あなたは、信頼できないよ。」と言いました。

その時、あなたはどのように感じますか。 不快な← →快な
なぜそのようなことを言われたのだと思いますか。

1 2 3 4 5 6

あてはまらない← →あてはまる

1 2 3 4 5 6

あなたに対して嫌悪感を抱いているから
たまたま〇〇さんの機嫌が悪かったから

1 2 3 4 5 6

問3 前から悪い印象をもっていた異性の〇〇さんと学内で話をしていました。

1) 〇〇さんは会話中あなたに「あなたは、信頼できるね。」と言いました。
その時、あなたはどのように感じますか。 不快な← →快な

1 2 3 4 5 6

なぜそのようなことを言われたのだと思いますか。

あてはまらない← →あてはまる

1 2 3 4 5 6

あなたに対して好意をもっているから
たまたま〇〇さんの機嫌が良かったから

1 2 3 4 5 6

2) 〇〇さんは会話中あなたに「あなたは、信頼できないよ。」と言いました。

その時、あなたはどのように感じますか。 不快な← →快な
なぜそのようなことを言われたのだと思いますか。

1 2 3 4 5 6

あてはまらない← →あてはまる

1 2 3 4 5 6

あなたに対して嫌悪感を抱いているから
たまたま〇〇さんの機嫌が悪かったから

1 2 3 4 5 6

問4 前から苦手だと思っていた同性の〇〇さんと学内で話をしていました。

1) 〇〇さんは会話中あなたに「あなたは、信頼できるね。」と言いました。
その時、あなたはどのように感じますか。 不快な← →快な

1 2 3 4 5 6

なぜそのようなことを言われたのだと思いますか。

あてはまらない← →あてはまる

1 2 3 4 5 6

あなたに対して好意をもっているから
たまたま〇〇さんの機嫌が良かったから

1 2 3 4 5 6

2) 〇〇さんは会話中あなたに「あなたは、信頼できないよ。」と言いました。

その時、あなたはどのように感じますか。 不快な← →快な
なぜそのようなことを言われたのだと思いますか。

1 2 3 4 5 6

あてはまらない← →あてはまる

1 2 3 4 5 6

あなたに対して嫌悪感を抱いているから
たまたま〇〇さんの機嫌が悪かったから

1 2 3 4 5 6

Table 1 相手に対する感情価, 好意 (非好意) 及び偶然への帰属度における平均評定値と SD

相手に対する印象			良い						悪い					
性	相手の性		感情価		好意・非好意 への帰属		偶然への 帰属		感情価		好意・非好意 への帰属		偶然への 帰属	
			P	N	P	N	P	N	P	N	P	N	P	N
男性 n=50	異性	M	5.44	1.94	4.04	4.24	4.08	3.48	3.98	2.24	3.46	4.50	4.14	3.50
		SD	0.64	0.86	1.06	1.46	1.21	1.47	1.21	1.26	1.10	1.47	1.28	1.54
	同性	M	5.00	2.22	4.44	4.14	4.02	3.54	3.44	2.12	3.54	4.56	3.84	3.34
		SD	0.82	1.03	1.25	1.28	1.36	1.40	1.22	1.26	1.15	1.40	1.27	1.50
女性 n=78	異性	M	5.51	1.55	4.15	4.40	3.82	3.38	3.95	2.09	3.85	4.65	3.95	3.29
		SD	0.64	0.71	1.12	1.44	1.21	1.30	1.22	1.18	1.16	1.49	1.23	1.46
	同性	M	5.67	1.58	4.88	4.28	3.76	3.56	4.03	2.09	4.03	4.55	4.00	3.41
		SD	0.61	0.84	0.85	1.53	1.39	1.40	1.23	1.12	1.02	1.31	1.21	1.38

2. 3. 調査手続

調査は、第 1 著者の授業において原因帰属の説明を行う際に実施した。事前には、原因帰属の教育的意義は説明せずに、上述した調査用紙を配布して、集団的に調査を実施した。調査は約 5 分で終了し、調査に関して個人データとして扱われないこと、成績との関連がないこと及び提出は任意であることが説明された。そして、承諾を得た者のみが調査用紙を提出した。しかし、受講生全員が用紙の提出に協力してくれた。なお、この調査結果の概略は、2 週間後の授業内にて説明を行った。

3. 結果

Table1 には、場面ごとの相手に対する感情価 (不快 - 快), 好意への帰属度及び偶然への帰属度における平均評定値と SD が示されている。

3. 1. 相手に対する感情評定値 (快 - 不快)

調査用紙の各場面に対する不快 - 快評定値について 2 (参加者の性; 男性、女性) × 2 (相手の印象; 良い、悪い) × 2 (相手の性; 異性、同性) × 2 (発言内容; P、N) の分散分析を行った。その結果、相手の印象の主効果 ($F_{(1,126)}=106.05, p<.001$), 相手の性の主効果 ($F_{(1,126)}=4.91, p<.05$)、発言内容の主効果 ($F_{(1,126)}=561.04, p<.001$) が有意であった。また、参加者の性 × 相手の性 ($F_{(1,126)}=17.92, p<.001$) の交互作用が有意であった。この交互作用について単純主効果検定を行ったところ、相手が異性の場合は性による感情価に違いはなかったが、相手が同性の場合においては男性に比べ女性の方が感情価の高くなる傾向が見られた ($F_{(1,252)}=2.86, p<.10$)。また、男性の場合において相手が同性の場合よりも異性の場合に感情価が高くなる ($F_{(1,126)}=20.80, p<.001$) が、女性の場合において相手の性による違いは見られなかった。

参加者の性 × 発言内容 ($F_{(1,126)}=7.85, p<.01$) の交互作

用が有意であったので、単純主効果検定を行ったところ、P 発言の場合には男性よりも女性において快感情評定値が高く ($F_{(1,252)}=5.56, p<.05$)、N 発言の場合では男性よりも女性において感情評定値が低かった ($F_{(1,252)}=4.88, p<.05$)。このことは、男性よりも女性が発言内容によって感情が左右されることを示している。すなわち、女性は男性よりも、P 発言ではより快に、N 発言ではより不快な感情が喚起されるのである。

相手の印象 × 相手の性 ($F_{(1,126)}=4.62, p<.05$) の交互作用も有意であったので、単純主効果検定を行ったところ、相手の印象が悪い場合、相手が同性の場合よりも異性の場合に感情評定値が高いが ($F_{(1,252)}=9.49, p<.01$)、相手の印象が良い場合には、相手の性による違いは見られなかった。さらに、相手の印象 × 発言内容 ($F_{(1,126)}=140.86, p<.001$) の交互作用も有意であり、単純主効果検定の結果、P 発言の場合には相手の印象が悪い場合よりも相手の印象が良い場合において感情評定値が高く ($F_{(1,252)}=246.01, p<.001$)、N 発言の場合には相手の印象が悪い場合より相手の印象が良い場合が感情評定値が低かった ($F_{(1,252)}=9.94, p<.01$)。

相手の性 × 発言内容 ($F_{(1,126)}=10.40, p<.01$) の交互作用も有意であったので、単純主効果検定を行ったところ、P 発言の場合において相手が同性の場合よりも異性の場合に感情評定値が高くなるが ($F_{(1,252)}=15.10, p<.001$)、N 発言の場合には相手の性による違いは見られなかった。

さらに、参加者の性 × 相手の性 × 発言内容 ($F_{(1,126)}=21.52, p<.001$) の交互作用が有意であった。単純交互作用検定を行ったところ、P 発言に関してのみ本人の性 × 相手の性の単純交互作用が有意であった ($F_{(1,252)}=39.43, p<.001$)。そこで、単純・単純主効果検定を行った結果、相手が同性の場合では男性よりも女性において感情評定値が高くなるが ($F_{(1,504)}=18.55, p<.001$)、相手が異性の場合には本人の性による違いは見られなかった。また、女性は異性の相手よりも同性の相手に P 発言

を行われたときに感情評定値が高くなる傾向が見られた ($F_{(1,504)}=2.86, p<.10$)。一方、男性は、同性の相手よりも異性の相手に P 発言を行われたときに感情評定値が高くなった ($F_{(1,504)}=51.66, p<.001$)。

ただし、参加者の性が他の要因との交互作用が認められるのは相手に対する感情評定値のみであったので、男女のサンプル数がそれぞれ十分ではないことを考慮して、以下の分析は男女込みで行うこととした。したがって、2 (相手の性; 同性、異性) \times 2 (相手の印象; 良い、悪い) \times 2 (発言内容; P、N) の分散分析であり、いずれの要因も参加者内要因である。

3. 2. 好意（非好意）への帰属度評定値

好意への帰属度評定値に関する分散分析の結果、相手の印象 ($F_{(1,127)}=7.46, p<.01$)、相手の性 ($F_{(1,127)}=9.38, p<.01$) 及び発言内容 ($F_{(1,127)}=7.50, p<.01$) の各主効果が有意であった。また、相手の印象 \times 相手の性の交互作用が有意であり ($F_{(1,127)}=6.39, p<.05$)、単純主効果検定を行ったところ、相手の印象が良い場合には相手が異性よりも同性に対する好意帰属が大きいが ($F_{(1,254)}=15.76, p<.001$)、相手の印象が悪い場合にはこの両者に差はない。また、相手が同性の場合には悪い印象の相手より良い印象の相手に対して好意への帰属が大きいが ($F_{(1,254)}=13.27, p<.001$)、相手が異性の場合にはこの両者に差はなかった。

相手の印象 \times 発言内容の交互作用も有意であり ($F_{(1,127)}=53.61, p<.001$)、単純主効果検定を行った結果、相手の印象が良い場合には相手の発言が P 発言でも N 発言でも好意・非好意帰属度に差はないが、相手の印象が悪い場合には P 発言に対する好意帰属よりも N 発言の非好意帰属が大きかった ($F_{(1,254)}=33.52, p<.001$)。また、P 発言の場合には、悪い印象の相手より良い印象の相手に対して好意帰属が大きく ($F_{(1,254)}=50.43, p<.001$)、N 発言の場合には良い印象の相手より悪い印象の相手に対して非好意帰属が大きいが示された ($F_{(1,254)}=10.42, p<.01$)。さらに、相手の性 \times 発言内容の交互作用も有意であったので ($F_{(1,127)}=17.46, p<.001$)、単純主効果検定を行ったところ、P 発言に対して相手が同性の場合は異性の場合よりも好意帰属が大きいが ($F_{(1,254)}=26.55,$

$p<.001$)、N 発言に対しては相手の性による違いはなかった。また、相手が同性の場合において P 発言と N 発言による好意・非好意帰属への差はなかったが、相手が異性の場合において N 発言に対する非好意帰属が、P 発言に対する好意帰属よりも大きかった ($F_{(1,254)}=17.34, p<.001$)。

そして、相手の印象 \times 相手の性 \times 発言内容の交互作用が有意であったので ($F_{(1,127)}=9.18, p<.01$)、単純交互作用検定を行った結果、P 発言に関してのみ相手の印象 \times 相手の性の単純交互作用が有意であった ($F_{(1,254)}=15.55, p<.001$)。そこで、単純・単純主効果検定を行ったところ、相手が良い印象の場合、相手が異性の場合よりも同性の場合に好意帰属が大きいが ($F_{(1,508)}=42.06, p<.001$)、相手が悪い印象の場合には相手の性による違いはなかった。

3. 3. 偶然への帰属度評定値

偶然への帰属度評定値について分散分析を行った結果、発言内容の主効果 ($F_{(1,127)}=24.80, p<.001$) が有意であったが、他の要因の主効果及び交互作用は有意でなかった。

3. 4. 帰属評定値と感情評定値の相関係数 (r)

原因帰属が感情に及ぼす効果を検討するために、Table1 に示した評定値間の相関係数(r)を算出した。その結果が Table 2 に示されている。

男女ともに、相手に対して良い印象をもっている場合には、P 発言がなされると、好意帰属と感情の間に正の相関が認められる。これは好意帰属によって快な感情が規定されていることを示している。しかし、相手に対して悪い印象を持っている場合には、P 発言がなされると、男子は好意帰属と感情の間に相関は認められないが、女子は有意な正の相関が認められ、相手が同性の場合も異性の場合でも一貫した結果であった。

4. 考 察

本研究では、豊田 (2012) と同じく仮想場面法を用い、相手との関係を反映する相手に対する印象 (良い、悪い) 及び相手からの発言内容 (P、N) を組み合わせた 4 つの場面を設定し、相手に対する印象と相手からの発言内容が相手に対する感情及び原因帰属に及ぼす効果を検討した。

Table 2 感情評定値、好意（非好意）及び偶然帰属評定値の関係 (r)

相手の性別 相手に対する印象 発言内容	相手が異性				相手が同性			
	良い印象		悪い印象		良い印象		悪い印象	
	P	N	P	N	P	N	P	N
男子 好意 (非好意) 帰属と感情	.48*	-.45*	.02	.02	.54*	-.33*	.06	-.23
偶然帰属と感情	-.10	.18	-.27	.24	-.02	.17	-.23	-.17
女子 好意 (非好意) 帰属と感情	.37*	-.14	.35*	.09	.54*	-.26	.45*	.02
感情価と偶然帰属	-.18	-.09	.02	-.08	-.19	.02	-.06	-.10

* $p<.05$

本研究で得られた結果は、以下の5つに要約できる。

4. 1. P 発言がなされた場合には、相手の印象が良い場合が悪い場合よりも快な感情が喚起されるが、N 発言がなされた場合には、相手の印象が悪い場合が良い場合よりも不快な感情の喚起が緩和される。

この結果は、P 発言と良い印象、N 発言と悪い印象というように発言内容と印象が適合している場合には、そこで喚起される感情はより快な感情であることを示唆している。反対に、P 発言と悪い印象、N 発言と良い印象というように発言内容と印象が適合していない場合には、そこで喚起される快な感情は抑制されるといえる。したがって、相手の印象から想定される発言内容のイメージと実際に受けた発言内容が一致しているか否かが感情を規定しているのである。先に紹介した豊田 (2016) や豊田・川崎 (2017) では、学習活動における努力と結果の随伴性に注目し、随伴している場合 (努力から予想される成果が得られた場合) が、非随伴な場合 (努力から予想した成果が得られなかった場合) に比べて次回への動機づけが高まることが示されている。本研究においても、対人感情において相手の印象と発言の随伴性あるいは適合性がより快な感情を喚起したといえる。

4. 2. P 発言がなされると、相手の印象が良い場合には相手が異性よりも同性に対する好意帰属が大きい、相手の印象が悪い場合にはこの両者に差はない。

豊田 (2012) では、異性及び同性の知り合いに対する好意帰属の程度を検討し、同性の方が異性よりも好意帰属されやすいことを明らかにしている。しかし、本研究では、相手に対する印象が良い場合と悪い場合によってその好意 (非好意) 帰属の程度が異なることを新たに見いだしたのである。

4. 3. 相手の印象が良い場合には相手の発言が P 発言の場合は好意帰属、N 発言の場合は非好意帰属を行うが、それぞれの好意及び非好意帰属の程度は同じくらいである。一方、相手の印象が悪い場合には、P 発言に対しては好意帰属の程度が小さくなり、N 発言に対しては非好意帰属の程度が大きくなる。

一般に、P 発言に関して快な感情が喚起されるのは自分に対する好意を感じるからであり、N 発言に対して不快な感情が喚起されるのは自分に対する非好意を感じるからである。したがって、好意帰属及び非好意帰属が感情を規定すると考えると、相手の印象が良い場合には P 発言及び N 発言に対して好意帰属と非好意帰属がそのまま感情に反映されていることがうかがえる。しかし、相手の印象が悪い場合には、相手から P 発言をされても、相手の印象の悪さと発言内容の良さの不適合性を感じ、その発言が自分に対する好意を反映したものとは考えられない。つまり、好意帰属傾向が弱まり、その結果、喚起される快な感

情は低くなるのである。一方、N 発言をした場合には、相手に対する印象の悪さと発言内容の悪さが適合しているので自然と非好意帰属をし、その結果、不快な感情が喚起されるのである。したがって、相手に対する印象と発言内容が適合しているか否かが好意 (非好意) 帰属の程度を規定する可能性が高いといえる。

4. 4. P 発言に対して相手が同性の場合が異性の場合よりも好意帰属が大きい、N 発言に対しては相手の性による違いはない。

豊田 (2012) では、好意帰属の違いを生み出す要因が対人距離であることを示したが、本研究では、P 発言と N 発言の違いも好意帰属の違いを規定する要因であることを明らかにした。P 発言を受けた場合には、同性からそのような発言をより自分に対する好意を反映したものであると考える傾向が高いといえる。しかし、N 発言に対しては同性と異性の違いはなかった。豊田 (2012) における対人距離が近い場合を同性に対する好意帰属が異性に対する好意帰属よりも高くなっている。対人距離が近いことは本研究における P 発言と同じく相手からの肯定的行動を受けた場面と考えるとそこに共通性がある。一方、対人距離が遠い場合を N 発言と同じく、相手からの否定的行動を受けた場面と考えると、そこでは確かに同性に対する好意帰属と異性に対する好意帰属との間に差は見いだされていない。これら2つの研究から考えると、自分に対する肯定的行動が好意帰属を喚起するが、その喚起度が異性と同性で異なっていると考えても良いであろう。今後の検討課題である。

4. 5. 良い印象をもつ相手から P 発言がなされると、男女ともに好意帰属によって快な感情が喚起される。一方、悪い印象を持つ相手から P 発言がなされると、女子は好意帰属をすることで快な感情が喚起されるが、男子は好意帰属が快な感情の喚起に結びつかない。

原因帰属の性差に関しては、達成場面における検討が多く、男子が女子よりも成功を能力に帰属しやすく (Deaux & Emswiller, 1974; Deaux & Farris, 1977)、女子は男子よりも運に帰属する傾向が示されている (Feather & Simon, 1975; Bal-Tal & Frieze, 1977)。これらの結果は、男性は能力に帰属することで自分の達成欲求を満たすことで、自尊感情を高めるが、女子は運帰属することによって失敗場面における自尊感情の低下を抑制する方略を用いている可能性がある。本研究では、サンプル数の関係から、参加者の性による原因帰属の検討は行っていない。しかし、男女の相関係数の違いをみると、帰属傾向と感情の関係に性差があることがわかる。本研究の結果が示すように、何故、悪い印象を持つ相手から P 発言がなされた場合に女子は好意帰属によって快な感情が喚起されるが、男子はそのような好意帰属と快な感情の喚起の関係が見いだせないのであろうか。それは、男子の場合には好意

帰属以外の要因が快な感情の喚起を規定しているのかもしれない。上述した自尊感情の高まりが快な感情を規定すると考えると、男子は好意帰属が自尊感情を高めることには結びつかないが、女子はその結びつきが強いという解釈ができる。本研究では自尊感情を測定していないが、自尊感情を指標として追加した研究が望まれる。

引用文献

- Bar-Tal, D. & Frieze, I. (1977), Achievement motivation for males and females as determinants of attributions for success and failure. *Sex Roles*, 3, 301-313.
- Deaux, K., & Emswiller, T. (1974), Explanations of successful performance on sex-linked tasks: What's skill for the male is luck for the female. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 80-85.
- Deaux, K., & Farris, E. (1977), Attributing cause for one's own performance: The effect of sex, norms, and outcome. *Journal of Research in Personality*, 11, 59-72.
- Feather, N. T. & Simon, J. G. (1975), Reactions to male and female success and failure in sexlinked occupations: Impressions of personality, causal attributions, and perceived likelihood of different consequences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 117-140.
- Heider, F. (1958), *The psychology of interpersonal relations*. Wiley, New York (大橋正夫 (訳) 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- 神田信彦 (2007), 原因帰属と気分・感情の関係の検討 『人間科学研究』 文教大学人間科学部 61-67.
- 鹿志村和子 (1987), 大学生の対人場面における関係的帰属と原因帰属の心理学的性差 社会心理学研究, 3, 1-10.
- 小川翔大 (2011), 他者からの同情によって生じる感情 - 出来事の原因帰属と相手との親密さによる感情の違い - 教育心理学研究, 59, 267-277.
- Rotter, J. B. (1966), Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- Snarr, J. D., Slep, A. M. S., Grande, V. P. (2009), Validation of a new self-report measure of personal attributions. *Psychological Assessment*, 21, 390-401
- 豊田弘司 (2003), 教育心理学入門 - 心理学による教育方法の充実 - 小林出版
- 豊田弘司 (2012), 対人距離が他者の行動に対する原因帰属と感情に及ぼす効果 奈良教育大学紀要, 61, 27-33.
- 豊田弘司 (2016), 努力と結果の随伴性, 感情及び動機づけの関係 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 2, 19-25.
- 豊田弘司・川崎弥生 (2017), 努力と成果の随伴性による原因帰属が動機づけに及ぼす効果 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 3, 23-30.
- Weiner, B. (1979), A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, 71, 3-25.
- Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W. H., & Cook, R. E. (1972), Causal ascription and achievement behavior: A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 239-300.